

## メッセージアウトライン 民数記12:1~16 「ねたみ」

[1]「そのとき、ミリアムとアロンは、モーセが妻としていたクシュ人の女のことで彼を非難した。モーセがクシュ人の女を妻としていたからである」

ミリアムはモーセの姉、アロンはモーセの兄。ミリアム、アロン、モーセというのが年齢の順番である。ヘブル語では主語が複数の場合、その中に一人でも男性が入っていれば、動詞は男性形をとる。しかし、この文の動詞は女性形単数となっており、このことから初めにモーセを非難したのはミリアムでアロンはそれに引きずられたと考えることができる。アロンは金の子牛の事件の時もそうであったが、自分の信念ではなく、人のことばによって動かされてしまう面があった。

「モーセが妻としていたクシュ人の女」とはモーセの妻はミディアン人のツィボラ(出2:21)であったので、これはツィボラのことを言っていると考えられる。クシュとは主にエチオピアのことを指すが、ミディアンを指していると思える箇所もあるので(ハバクク書3:7)、ミリアムがツィボラのことをクシュ人と呼んだということが考えられる。別の解釈ではツィボラはすでに死んで、モーセは新しく、イスラエル人の中に入り混じって来た外国人の中からクシュ人(エチオピア人)をめとったという説もある。しかし、ツィボラは子どもたちと共にミディアンの父のもとに送り返されていたが、イスラエルの民がエジプトを脱出し、シナイの荒野を旅していた時に、父親と共にやって来てモーセと再会したばかりである。それゆえ、ツィボラが死んですぐに新しいエチオピア人の女性を妻にめとったというのはどう考えても無理がある。とにかくミリアムはモーセがツィボラという外国人の女性を妻にしていたので、それを理由にモーセを非難したのであろう。

[2]「彼らは言った。『主はただモーセとだけ話されたのか。われわれとも話されたのではないか。』主はこれを聞かれた」

ここに彼らの本音が表れている。モーセの妻のことは口実に過ぎない。ミリアムとアロンは、主はわれわれとも話されたのではないかと言っているが、そのような事実はない。

シナイ山において十戒をはじめとする律法を授けられた時もモーセのみ主のもとに近づくことができたのであり、他の者たちは近づくことができなかった。たしかにアロンは口の重いモーセと共に行動し、もっぱら民に語る働きをした。彼はモーセの代弁者、スポークスマンであった。ミリアムも出15:20では女預言者と呼ばれているので、ある程度指導者的な働きをしていたのかもしれない。ミリアムは自分がアロンとモーセの姉で、しかも昔、モーセがあのだナイル川にパピルスのかごに入れられて葦の茂みに置かれた時、機転を利かせて彼のいのちを救い、エジプトの王女の子と

して育てられるようにした(出2:1~10)のは自分だ。自分はモーセのいのちの恩人だという自負心があったのかもしれない。それでモーセばかりどうして主に重んじられるのかというような思い、すなわちねたみの心を持つようになったと考えられる。ねたみは生まれながらの人間の持つ肉の働き→ガラテヤ5:19~21「主はこれを聞かれた」とは、主は彼らのモーセに対する非難のことばを聞き逃さず、心に留められたという意味である。その結果は4節以下。

[3]「モーセという人は、地の上のだれにもまさって柔和であった」

このことは、モーセが二人の非難に対して自己弁護せず、黙って正しくさばかれる主にすべてを委ねている態度を示しているのであろう。神との深い交わりの中に生きる人は、謙遜、柔和な人へと変えられていく。これも主の恵みである。

[4-6]「主は突然、モーセとアロンとミリアムに、『あなたがた三人は会見の天幕のところへ出よ』と言われた。そこで彼ら三人は出て行った。主は雲の柱の中であって降りて来られ、天幕の入口に立って、アロンとミリアムを呼ばれた。二人が出て行くと、主は言われた。『聞け、わたしのことばを。もし、あなたがたの間に預言者がいるなら、主であるわたしは、幻の中でその人にわたし自身を知らせ、夢の中でその人と語る。』」

主はまずモーセを含む三人を会見の天幕のところへ呼ばれた。

会見の天幕(幕屋とも呼ばれる)→40:2,17

エジプト脱出の第二年目の第一の月に幕屋は建てられていた。この幕屋に関する詳しい説明は→出35~39章

主はさらにそこでアロンとミリアムを呼ばれた。主は彼らに「聞け、わたしのことばを…」と言われる。預言者は目覚めている時は幻の中で、眠っている時は夢の中で主の啓示を受ける。これが、主が人間に対してとられる通常の啓示のスタイルであった。→創世記15:1、ダニエル8:1, 10:1、創世記28:11~15、31:11

[7]「だがわたしのしもべモーセとはそうではない」自分たちもモーセと同じではないかと主張した彼らに対して、そうではないと主は言われる。

「彼はわたしの全家を通じて忠実な者」…わたしの全家とはイスラエルの民全体のこと。モーセは主のしもべとして、イスラエルの民全体を委ねられた忠実な者であると認められている。これはモーセの地位の独自性の宣言である。

[8]「彼とは、わたしは口と口で語り、明らかに語って、謎では話さない。彼は主の姿を仰ぎ見ている」モーセは普通の預言者たちのように幻や夢によってではなく、直接主と交わり、口と口とで自由に語ることができた。「主の姿を仰ぎ見ている」とはモーセだけが主の姿を見、主と親しく交わることが許されていたという意味である。罪ある人間は聖なる神を見ることができない。見ると死ぬと他の個所で言われているが(イザヤ6:5、師士記13:22)、モーセだけは主が許してくださる範囲で主の姿

を見て交わることができたのである。これは大変な特権であった。

それゆえ主は「なぜあなたがたは、わたしのしもべ、モーセを恐れず、非難するのか」とモーセの権威を認めようとしなかったミリアムとアロンを叱責されたのである。モーセをイスラエルの指導者として選び立てられたのは主なる神ご自身であった。それなのになぜモーセを非難するのかと主は怒られたのである。モーセは自分で立候補したのではなく、神ご自身によって選び立てられたのである。今、主なる神ご自身がそのことをはっきり宣言しておられる。神ご自身がそのように言われたならば、彼らはそれに聞き従わなければならない。

[9]「主の怒りが彼らに向かって燃え上がり、主は去って行かれた」

主は彼らの誤りと愚かさを指摘された後、言い訳など許さずに怒りを示して去って行かれた。

[10] 雲が天幕の上から離れ去ると、ミリアムは皮膚がツアラアトに冒され、雪のようになってしまった。ツアラアトは聖書では、人間だけではなく、建物の壁などにもできると書かれており、これが人間にできる場合は重い皮膚病のような症状を示した。→レビ記13～14章

ミリアムだけがこの病にかかったのは1節で見たとおり、アロンはミリアムにそそのかされ、巻き込まれたという理由からであろう。しかし、アロンも主から叱責される者であることに間違いはない。

[11-12]「アロンはモーセに言った。『わが主よ。どうか、私たちが愚かにも陥ってしまった罪の罰を、私たちに負わせないでください。どうか、彼女を、肉が半ば腐って母の胎から出て来る死人のようにしないでください』」

このようにアロンは自分たちの罪を告白し、姉のミリアムのためにモーセにとりなしを願う。

[13-14] それでモーセは主にとりなしの叫びを上げるが、主の答えは厳しいものであった。ミリアムは七日間宿営の外に締め出されることになる。そしてその後で、彼女は宿営に戻ることができるのである。

[15]「それでミリアムは七日間、宿営の外に締め出された。民はミリアムが戻るまで旅立たなかった」

ミリアムはこのようにして公的に七日間、自分のしたことのさばきを受け、恥を負うことになった。しかしこの七日間のうちに彼女の病はいやされ、きよめられたのである。これはモーセのとりなしの祈りと主のあわれみのゆえであった。そしてミリアムが七日たって宿営に戻るまでイスラエルの民は旅立たなかったのである。

[16]「それから民はハツェロテを旅立ち、パランの荒野に宿営した」

約束の地に向かってイスラエルの民はゆっくりと北上を続けるのであった。

今日の個所から教えられることは何か。

ねたみがミリアムを突き動かして、アロンを巻き込み、モーセを非難した。しかし、

モーセを特別に出エジプトの指導者として選び立てられたのは主なる神ご自身であった。ミリアムとアロンは自分たちの考えではなく、神のことば、神の權威に従う必要があった。

神によって立てられたモーセを非難したミリアムとアロンに主は怒られ、首謀者のミリアムを主はツアラアトの病をもって打たれた。ミリアムのねたみのもたらしたものはモーセへの非難であり、主の怒り、主のさばき、そして恥と不面目であった。イスラエル全体も影響を受け、彼らは七日間旅立つことができなかった。

確かに主はイスラエルの民全体をエジプトから脱出させ、彼らと契約を結び、ご自身の民、神の民として導いてくださるが、その神の民にもやはり秩序と役割がある。

モーセは指導者として立てられた。權威ある立場であるが、それゆえ非常に重い責任を負わせられている。それでその重荷をモーセと共に負うために、主は七十人の長老たちを立てられた(民11章)。さらに民全体の組織としては千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長が立てられている(出18:25)。

神の民一人ひとりにその役割があり、主に導かれつつ約束の地へと歩んで行く使命がある。他の人々の立場や役割をねたんだり、不平不満を言うことは今日の個所からもわかるように大きな問題と痛みをもたらすことになる。

教会は信仰によるアブラハムの子孫であり、神の民である。神がエジプトでの奴隷状態からイスラエルの民を導き出されたように、罪と死の奴隷となっている私たちすべての人間をモーセならぬ神のひとり子イエス・キリストをこの世に送ってくださり、その十字架の身代わりの死によって、私たちの罪を負ってくださった。このイエス・キリストを自分の救い主であると信じ告白した者は神の民とされ、靈的イスラエルとされるのである。→ガ

ラテヤ3:26, 29, エペソ2:11~13, 19

私たちは信仰によるイスラエル、神の民、神の家族とされている者として人をねたんだり、非難したりするのではなく、お互いに与えられている立場で、主のみことばに従い、互いに助けあい、励ましあい、支えあって約束の天の御国へ入るまで日々の歩みを進めていくことが大切である。

→ヘブル13:17, ガラテヤ5:16, 22~26, I コリント9:24~27